

作品タイトル「幸福に触れた日」

――あ、学校に傘忘れて来てしまった。

乗換駅の地下鉄烏丸御池駅構内、太秦天神川行きホームにちよんと備え付けられているオレンジ色のベンチに腰かけて、太秦萌は大きく溜め息をついた。

昨夜遅くから降り続いていた雨は、天気予報通り昼過ぎから止んで、空はからりとした秋晴れに表情を変えた。

今日は傘の置き忘れに気をつけましようね、と、お天気お姉さんが笑顔で忠告してくれていたのに。

下駄箱脇の傘立てに置き忘れた傘は、明日回収するしかないだろう。

――たしか、明日も雨の予報やったなあ。天気予報ってあんまり外れへんし、しゃあない、折り畳み傘で出かけるしかないなあ。

うむむ、と唸る萌の周りから、急に人波が引いていく。電車が来たのだ。

背後でアナウンスが流れ、ややして六地藏行の電車が東へ走り去っていった。

萌の住む太秦行きの電車も、もう間もなく到着する。

電車待ちの列の最後尾に並ぼうと立ち上がった萌は、何かにつまずきかけて、「あれ？」と思わず声を上げた。

「傘の忘れ物……？」

ベンチに引っ掛けられていたのは、丁寧に畳まれた赤い長傘だった。差して歩けば雨降りの憂鬱がどこかへ吹き飛ばされるような、はっと目を惹く素敵な雨傘。木製の柄からは赤い房飾りが垂れ下がり、あまり見たことのない細工だった。

今の反対方向の電車に乗っていった乗客が忘れていったのだろうか。

しかし、萌は隣に座っていたオシャレな女性が、電話をしながら慌てて立ち上がり、ヒールを鳴らしながら足早にホームを後にしたような記憶が臍げに残っていた。

萌は少しだけためらったのち、階上の改札の方角を見つめて、ひとつ頷いた。

帰宅する人の流れに逆らって、肩を竦めながら階段を駆け上がる。

少しだけ長い階段を昇りきって、改札口の前に立った萌は、そこで途方に暮れて、きよろきよろと辺りを見回した。

改札を出ると、出口は四つに分かれてしまう。

「赤い傘、赤い傘！　お願いやから、持ち主のお姉さん、気づいてえ！」

傘を掲げるようにして軽く振ってみるが、足を止める人はいない。萌の様子に気づいた人は、怪訝そうな顔をして首を傾げ、通り過ぎていく。頬を赤くしながら、なおも傘を振る萌に、

「あれ、萌ちゃんやん。どないしたん？」

救世主の声が掛った。

「タケルさん！」

「学校帰りなん？　家は天神川の方やったつけ。俺とは反対方向やなあ」

萌の幼馴染である小野ミサの兄、小野陵の友人の十条タケルが、満面の笑顔を浮かべて立っていた。

陵とタケルも、きつと萌とミサ、そして松賀咲の三人と同じように『親友』なのだろう。見るからにタイプの違う二人は、片方が大学生、もう片方はパン職人の見習いになったというのに、よくつるんでいる。

姉の麗と二人姉妹の萌は、もし自分に兄がいるならタケルのような人がいいな、と思っている。彼の持つおおらかな明るさは、萌を温かい気持ちにさせるのだ。

「—そうや、タケルさんに相談してみたらどうやろ。大人やし、わたし一人で悩むより、きつとずっといいアイデアが浮かびそう。」

そう閃いた萌が口を開くより先に、タケルが赤い傘を指さした。

「んん？　萌ちゃん、その傘どうしたん」

「さつき、ホームのベンチのところで拾ったんです。たぶん忘れ物やないかと思います」

「俺、その傘知ってるわ」

「ほんまですか！？」

「うん」

にかりと白い歯を見せて頷くと、タケルは顎の下に拳を当て、少し考えこむような顔になった。

「俺の働いてるパン屋の常連さんが、それとおんなし傘を持ってはる。すごく大事にして

る傘だとかで、もし店の外の傘立てに置いておいて誰かに盗まれたら嫌やからって、丁寧
に丁寧に雨粒を払って、肌身離さず持ち歩いてはった」

それを聞いて、萌は目を二度、三度とまたたかせた。

「……そんなに大事にしてはったなら、忘れたりせえへんですよね……」

「せやな。でも、その房飾り、台湾のお土産だって話してたのを聞いたことがあるから、
やっぱりうちの常連さんのやと思うわ」

二人して首をひねりながらも、やはりこの傘はタケルの店の常連の女性のものだという
話に落ち着き、萌は彼に傘を託し、地下鉄に乗り込んだ。

電車に揺られて、黒い車窓に映る自分の顔を見つめながら思案する。

――お店の中にまで大事に持っていく傘を、なんで駅に忘れはったりしたんやろ。

大秦天神川駅到着のアナウンスが流れた。

改札をくぐり抜けて長いエスカレーターを上り、ロータリーを越して嵐山の方角へ歩き
ながら、萌はまだぼんやりと考えていた。

西の空、嵐山の山あい、オレンジ色に染まっている。マンションや建物に阻まれても、
残照や朝日を覗き見ることのできる盆地の京都市が、萌は好きだ。

まばゆい陽光の残滓に目を焼かれそうな西の空、太陽の切れ端が袖を振っている。
夜の訪れを思わせる重い橙に染まった雲がたなびく嵐山。

この光景は、萌にとっては当たり前だけれど、京都で生きていない人にはそうじゃない。
雅やかなのに人なつっこくて、情に厚い。バスに乗ればおばあちゃんが「あんたたち、
どこへ行かはるの」と、ふくふくとした笑顔で尋ねてくる。

――ああ、そこならわたしの実家のすぐそこやわ。昔はバスを乗り継いで出町柳まで出な
ならんかったんやけど、今は地下鉄が出来たから便利になったわあ。あそのみたらし、
食べはったことある？ 言うてる間にバスが来たわ、はよ乗り、楽しんできはってね！――

萌の暮らす町。

大好きな京都。

そんな町に似合う人間に、萌はなりたい。

三本鳥居のお社に程近い我が家の扉を開ける頃には、ひどく幸せな気分を満たされてい
た。

「ただいま！」

※ ※ ※

翌日の早朝、タケルから入ったメッセージには『傘の落とし主、お店に来てくれはったよ！ 萌ちゃんにお礼をしたって言ってはった』と書かれていたが、萌としては持ち主の手にあの傘が戻ったことが分かっただけで満足だったから、『お気持ちだけで充分です、と伝えといて下さい』と、お気に入りのスタンプと共に送って画面を閉じた。

それから幾日か経ち、気持ちはすっかり中間テストに向いていた頃、タケルからメッセージが届いた。定期的に送られてくる新作パンの案内だ。

パッションフルーツをふんだんに使ったというタルトに惹かれて、足はいつのまにか丸御池駅の改札を抜け、地上へと向いていた。

「こんにちは」

少しだけ重い木の扉のアンティークな取っ手を引いて、ひよっこり顔を覗かせる。

顔なじみの店員のお姉さんが、萌に気づいて笑顔で頷いてくれた。タケルを探そうとすると、あっちあっち、とイトインスペースを指さされる。指先につられるようにして顔を向けた萌の視界に飛び込んできたのは、あの日の赤い傘だった。

——あ……！

TO さんだろうか、姉の麗と年代に見える背筋のすっとした美しい女性が、花がほころぶように萌へと微笑みかけてくる。

「ほらほら萌ちゃん、ぼうっとしてないで座りや」

入り口に背中を向ける形でOさんの正面に座っていたタケルが、椅子の背もたれに手をかけるようにして振り向いた。

「私、どうしてもお礼を言いたかったんです。親切なお嬢さんに」

「ええ、僕も。だって、僕から彼女へのプレゼントだったんですから」

女性の隣りには、スーツを隙なく着こなした男性が寄り添っていた。

「この人、出張で海外に行ってたんやけど、新型コロナウイルスの関係ですつと足止めされて、帰国出来ひんかったの。それがあの日、帰ってこられるって話になってね、嬉しくって思わず電波のいい地上に飛び出してしまったのよ」

うっすら頬を染める女性は、確かに大人であるのに、どこか少女めいていた。

「—そうやったんや。プレゼントだったから、あんなに大事に大事にしてたんやね。大好きな人からの贈り物やもの、大切に使うよね。特別な傘になるよね。」

大切にしている傘よりも更に大事な人に逢える喜びに沸き立ったなら、忘れ物にも領ける。

思わず笑顔になった萌を見て、並ぶ二人もにっこりと顔を見合わせた。

今も赤い傘を携えたままの婚約者を、優しい眼差しで見やる男性に、萌は胸いっぱい幸福を貰った気がした。

「—ええなあ。わたしにもそんな男の人、現れへんかなあ。」

ふと思いついて隣りのタケルを眺めやれば、

「ん？ 萌ちゃん、おなか減ったん？」

ほおばったパンでいっぱい口の口をもごもご動かしながら、そう問いかけてきたので、

「ないない。色気より食い気やもん。ああ、わたしの春はまだ遠いみたいやなあ……」

そう呟いて、幸せそうな三人の微笑みを受けながら、萌はタケルと同じようにぱくりとケーキに噛みついた。

美味しいケーキからは、甘酸っぱい南国のフルーツの風味と—やっぱり幸福の味がした。